

1

◎第1回 2022年2月20日(日) 20:00~21:30

「分けないと多様性—視覚障害のためのインクルーシブアート教育とは何か」

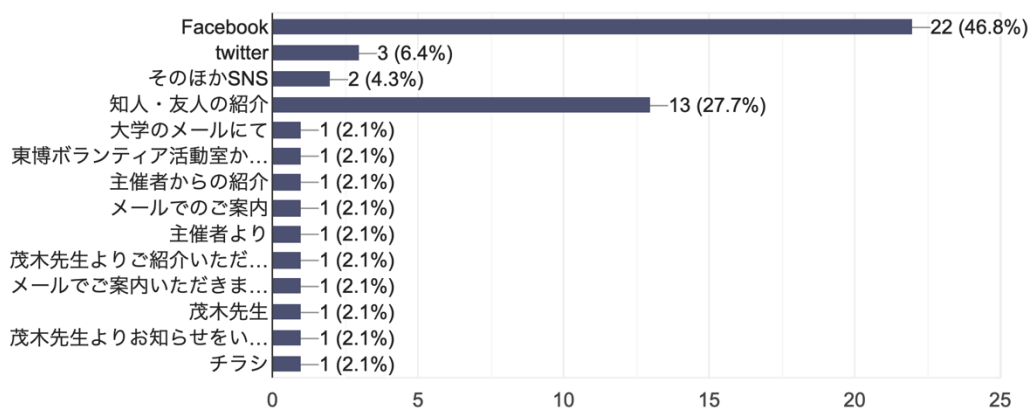
登壇者:伊藤亜紗(東京工業大学)×広瀬浩二郎(国立民族学博物館)×大内進(元国立特別支援教育総合研究所)×茂木一司(跡見学園女子大学・司会)

【アンケート1】『視覚障害のためのインクルーシブアート学習:基礎理論と教材開発』 結果まとめ

出版記念オンラインイベント(回答)

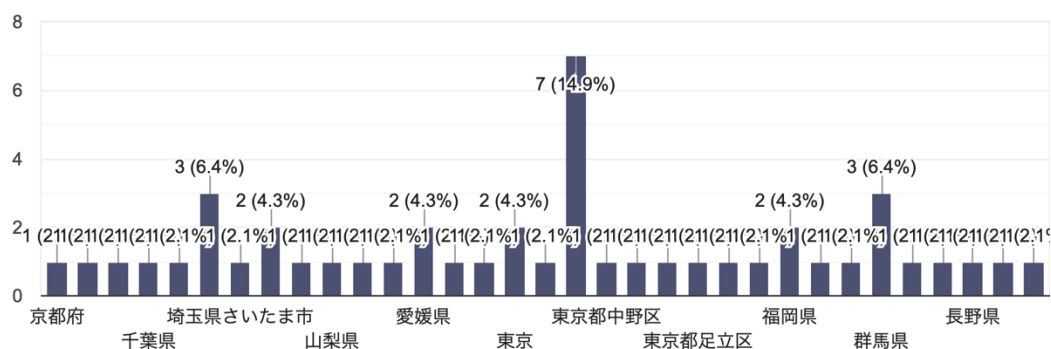
1.このイベントのことを、どのようにしてお知りになりましたか。

47件の回答



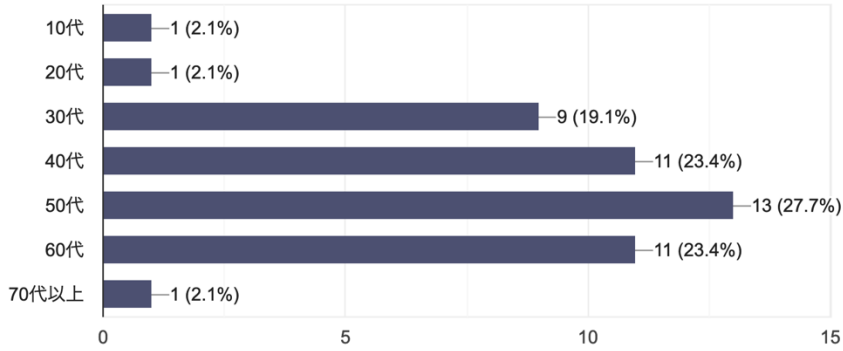
2.どちらにお住まいですか？

47件の回答



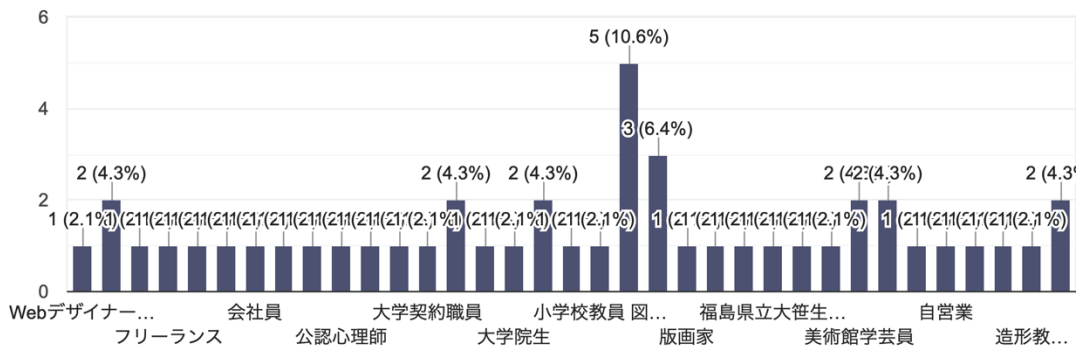
3.ご年齢を教えてください。

47件の回答



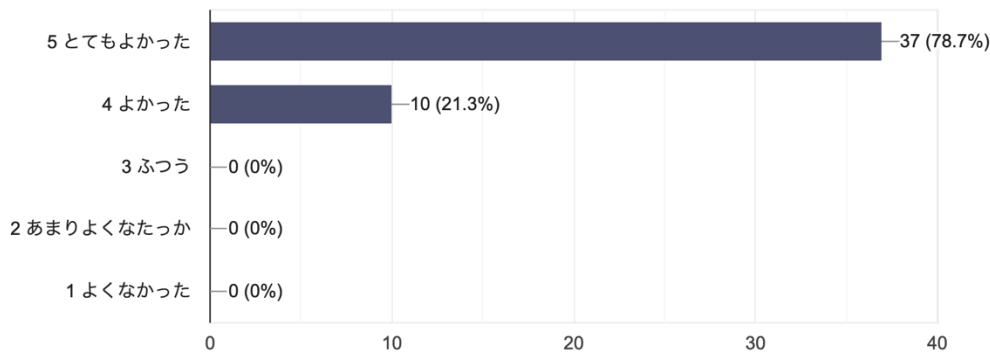
4.ご職業を教えてください。

47件の回答



5.本日のイベントはいかがでしたか？

47件の回答



6.ご意見・ご感想・ご質問など

ありがとうございました
 大変勉強になりました。ありがとうございました
 それぞれの立場からの共有する過程が興味深かった。
 突然、参加を決めましたがとても有意義な時間でした。
 ありがとうございます。
 本も購入したいと思います。

盲学校では美術の教科書が作られていないことから共有できる教科書をというお気持ちがよくわかりました。たしかに、各学校で工夫をされていても、それを公的に共有することが必要ですね。次回以降も楽しみにしています。ありがとうございました。

視覚障がいの方の「もののみかた」を知ることができ、とても参考になりました。

期待以上に楽しく興味深いトークイベントでした。次回以降も楽しみにしています。広瀬さんの企画された展示をいつかみたいですよ。

とても興味深くお話をうかがいました。ありがとうございました。

伊藤さんの著作に関心があり、試聴しました。イタリアの特別支援教育(レッジョ以外のことを知らないので知りたくなりました)、みんなの行きたかった展示(無理にでも行けばよかった)、特別支援教育の今、アートの役割、触れる、さわることの意味など、あっという間に時間が過ぎました。「心の中でビジュアライズしている」ことが「みる」という言葉を噛み締めながら、火曜日を心待ちにしています。ありがとうございました。

広瀬先生の「見る」と「みる」の違いについての、大内先生の「頭の中の空間的イメージ」についての話、とても興味深く拝聴しました。ありがとうございました。

何度もお話に出ていたように、長い歴史と伝統のある視覚障害教育ですが、図工や美術の教科書がない中で、大切な理論的資料と実践記録集ができたことは嬉しいと思います。全国で毎日実践している特別支援学校の教員にとってとても役立つ本になるでしょう。他の障害種でも、このような本があればと思います。

このような試みで得られた知見が、カリキュラム・マネジメントを試みる際、他教科との連携や協働に役立つことを期待します。

みることについて改めて考える機会となりました。ありがとうございます。次回も楽しみです。

本日は、それぞれの先生方から貴重なお話を聞ける機会となり、大変勉強になりました。

(時間も内容もとてもちょうど良く、大変聞きやすかったです)

「鑑賞」と「表現」を分けない。また、「見える」「見えない」を分けない。とてもアートの目標であると同時に、広瀬先生がお話しされていた「視覚障害者はまず認知が必要であり、現在の日本では鑑賞まで行っていない」という部分も、とても共感しています。みんなの展覧会で、自分に「触る作法／訓練」が足りていないことを痛感させられましたし、私自身が美術館で取り組んでいる「みえない方と一緒にみるツール開発・活用」も、「認知」と「鑑賞」をどのように結びつけるか、課題となっている部分でもあります。

本日の話の中には、そういったことを考えるたくさんのヒントが入っており、もう一度本を読み返してみようと思います。

今回の本の出版がきっかけとなり、日本にも「触識」教育？が広まり、その中でも、アート学習が生きることにつながる(生きること豊かにする)教育であることが、もっと広まってほしいと思いました。貴重なお話をありがとうございました。

第2回も楽しみにしております。(4回とは言わず、もっとたくさんこのような場を設けていただきたいです！)

視覚障害者の美術教育の現状やその周辺の先行的取組等、幅広い情報を得られ、大変貴重な時間となりました。また、発表者のお話を通して、背景となる教育全体や美術教育の哲学のようなものや理想について考える機会をいただきました。「見る」と「みる」、「触る」と「さわる」、「さわる」と「ふれる」も大変勉強になりました。今度、自然物や立体作品の鑑賞を「ふれて」「みる」でやってみたいなと思いました。次回も楽しみにしております。ありがとうございました。

「ユニバーサル・ミュージアム」の展示の「触覚」をめぐる話がとくに興味深かったです。

展示やアートを通して、触(ふ)れ方や触れられ方に関する言葉が築かれていければと思いました。あらゆる障害者に「触れる」ことで経験されているものがあるのかなと思いを馳せました。

目が見えない人の「みる」話が興味深いです。

モノを触覚や聴覚だけで認識しカタチを把握するといった機能的な認知手段の他に、

健常者と視覚障害者のいずれもが「アートを通して見えない世界をイメージする」という部分が共通しているということを知って新鮮だったし、改めてアートの力を知りました。

健常者でも世界に対するイメージ(想像力)の貧乏な人が多いと思います。それは日本の教育の問題が大きいと思います。国語の教科書から文学を無くす方向に向かうとか、美術の授業に仕上がりと同様のキットを用いるとか。共通の平均化されたコードに感性を縛り付けるということはコードの外の声が聞こえなくなる＝イメージがみえなくなる、ということだと思います。

結果、生きているという現実が無味乾燥な作業になってしまって、生きている喜びも見いだせなくなり自殺者もでるのでしょう。

今日別のオンラインカンファレンスで共感した考え方に、日本人は官と民の意識は強くありますが公(パブリック)の意識が希薄であるということがありました。アートはこの公を作っていけるツール(媒体)になり得ると思います。

いろいろとインスピレーションを頂けるトークでした。ありがとうございました。
執筆者の先生方の意見が、多方面からの切り口でとても興味深く拝聴しました。
今回の本が視覚障害教育だけでなくインクルージョン教育全体の良い先駆けとなって頂けたらと思います。

それぞれの立場での発言が迎合することなく聞けて面白かったです！
茂木先生の最初のお話、とても共感いたしました。全体性ととらえると、特別支援教育との境界が崩れます。残りの3回を楽しみにいたします。ありがとうございました。

ありがとうございました
視覚支援学校の美術教育に携わる当事者として興味深くお話をきかせていただきました。
今回のお話の中で、現場の人間としては「教科書」は無くてもよい、と思っています。
ただし、美術専門でない人が美術を担当された時に「指導書」があると楽になるのかなと感じました。

色々と考えたくなる話題をありがとうございました。
また、次回も楽しみにしております。
ちょうど広瀬さんの『触常者として生きる』を読了したところでしたので関心を持って参加させていただきました。学校での美術教育と教科書指導書問題については全くの門外漢ですが、ミュージアムのインクルーシブアートとは？を考えるキーワードがいくつも出てきて大変刺激になりました。当日申し込みを受け付けていただき感謝しております。以降の回も楽しみにしております。今日はありがとうございました。
本日は貴重なお話し有難うございます。インクルーシブ教育に関わり、とても示唆的な内容をいただけたと感じております。特に、教科書についてのお話に関して、学習の画一化というところが配慮しなければならないですが、これまでの現場への経験の蓄積とそれを積み上げていくという営為も感じられました。知識を児童を含め参加する人々で構成していく、また各地域・学校の文脈に合わせてローカライズしていくことが重要と感じるとともに、それらのアートの学びを通じて心地よいカオスが生成されたら楽しいだろうなと聴いておりました。有難うございました。
初めて知る事ばかりで、見て良かったと思いました。また、アート鑑賞についての様々な視点を得られたのも有意義でした。

イタリアのフルインクルーシブ教育については、実際の仕方や、困難な点をどう工夫しているのかなど、具体的にもっと知りたくなりました。

現在、当館でも絵画の鑑賞方法を模索する中で、触図や対話型鑑賞法などに取り組んでおり、作品の理解、鑑賞に関して大変興味があり受講させていただきました。

企画していただきありがとうございました。
このトークイベントも、書籍化されてはいかがでしょうか？
手に取りやすい価格、親しみやすい体裁にして、多くのひとに読んでもらえるとうよいと思います。わたしも周囲にすすめます。

書籍読んでいないのですが、今回のお話を聞いて読んでみたくになりました。これは、本編と関係のない話なのですが...もし可能でしたら、YouTube などアーカイブ動画として、振り返って拝見できる機会があれば、嬉しいなと思いました。アーカイブ動画があると同僚や知り合いへ「オススメしたりしやすいな」と思いました。

美術の教科書がないことに驚きました。必要性の有無は障害の有無とは関係なく検討するとして、現状では全ての子どもに配布してほしい。今なら技術的にも可能だし、見える子どもの教科書を合わせて変えていくこともあると思います。今回の出版の意義を少し理解いたしました。ありがとうございました。

書籍の内容をさらに分かりやすく、執筆者それぞれの見解を聞くことがてまきました。

興味深い内容だった。刺激になった。

見えない人の制作や鑑賞から自分にとっての制作や鑑賞がより明らかになるヒントを得られた。
もっと知らないといけないのですが、今回のお話を伺った中で、「分けない」ことにもメリットがあるし、「分ける」ことにもメリットはあるように感じたので、両方の良いところをとって、ハイブリッドにできればいいのかななどと考えました。次回以降も可能な限り参加して、理解を深めたいです。

ゲストのみなさん、それぞれもっとお聞きしたいことばかりでした。特別支援学校の美術教育については知らないことが多く、勉強になりました。障害の有無を越えて実践にとっても興味があります。ひきつづき楽しみにしています。本も届きました。読みながら参加していきたいと思えます。

数年前、森美術館でのワークショップ開催時には伊藤さん、郡司先生、大変お世話になりました。森美術館の白濱恵里子です。コロナにより展示を拝見できず残念に思っておりますが広瀬さんのお話を久しぶりにオンラインでお聞きすることができ、大変嬉しく存じました。

今回のイベントは、『美育文化』元編集長の穴澤さんから教えて頂きました。
盲学校に美術教科書がない(広瀬さんのエピソードではつるつとした表紙の本が配られるけれども)ということ、恥ずかしながら初めて知り、ショックを受けました。

美術が「視覚を基盤にしているが故に盲学校を視野に入れることができなかつた」時代から、早急に脱し、発展させなけ

ればならないと強く感じました。

そのためには狭かった視点を大幅に変えていく必要があり、昨日のご登壇者のみなさまのご意見は極めて的を射たものであったと感じております。

美術が擁する性質は、旧来よく言われる固定化された意味合いの視覚芸術という狭いものだけではなく、昨日議論されましたように奥深い可能性が内包されています。近年多くの実験的な活動も行われており、その実践者・研究者のみなさまの知識・経験が今後大いに生かされるべきだと感じました。

まずは本を購入させて頂きたいと思っております！今後ともどうぞよろしくお願い致します。

参加者の皆さんとインクルーシブアート教育の概念を分かち合い、具体的な教育実践を行っていく第一歩となる豊かな時間に参加できましたこと、感謝申し上げます。

茂木先生の目指す方向性、ゲストの皆さん、それぞれの思いや主張をお聞きできて、あらためて障害の有無にかかわらず、視覚優位に偏った美術教育全体の問題として問い直す視点をいただきました。「触る」ではない、「ふれる」(双方向性のある)美術教育＝対話的であることの可能性をさらに考えていきたいと思いました。

教科書が存在しないことなど、視覚支援学校での図工美術教育の問題は今までも大きかったかもしれませんが、地域の学校の図工美術教育の動き同様かそれ以上に、数年単位で支援学校内を異動になる図工美術の先生の指導内容によって、義務教育期間中に受けられる図工美術教育の中身があまりにも異なりすぎるように思います。もしかすると、教科書が存在しないことによって、地域の学校以上にその格差は顕著なのかもしれません。

私は音楽を専門にしていますが、インクルーシブな即興表現に興味があり、本日のご発表は非常に示唆にとんでいて、楽しく拝聴いたしました。残念ながら、別会議があり、冒頭茂木先生のお話を聞き逃してしまいました。レジュメ等ございましたら、拝見させて頂ければ幸いです。どうぞよろしくお願い致します。

4名の先生のそれぞれの考えがよく分かり、とても興味深かったです。

視覚障害の方にとって「触る」ことは「手でみる」ことであり、障害のない方が「見る」よりもずっと能動的な行為であると感じています。そして、「触る力」は長い時間をかけて育てないと身につかないものであるというお考えに強く共感を覚えます。「みんなくのにユニバーサルミュージアム」の展示を触ってみましたが、晴眼の私にも、もっと「触る力」があったら、楽しめることができるのではないかと感じました。

「触る」・「他者の言葉を聞く」などを通して作られるイメージも、その方の視覚経験の有無によってかなりの影響を受けるのだらうと感じています。もしできれば、その辺りのことにも触れていただけると嬉しいです。

今後の視覚支援学校の図工・美術教育、インクルーシブアート学習について考える当たって大変示唆に富んだ講演でした。触ることを土台として、そこから思考することについて考えながら、視覚に障害のない人もある人も共に取り組める活動を考えていこうと思います。

遅くまでありがとうございました。

視覚障害者の学びの現状がわかり、あと3回の講演内容に期待を持つことができました。

「TVをみる」という話。「みる」ということの意味が問われていて、これが特に興味深かった。視覚で見ているときはいったい何を見ているのだろうか。

伊藤さん、広瀬さん、大内さん、それぞれのお立場からの貴重なお話を聞くことができ非常に良い機会でした。広瀬さんのお話を聞いて、見えない人にとって、まず何よりも触覚を使って能動的に情報をつかみに行くということが重要なのだなと感じました。そのうえで、美術館は盲学校教育をサポートするという立場で、「徹底的にさわる経験を積めるようなプログラム」があっても良いなと思いました。そして、それとは別に「さわり倒したうえで、じっくり味わうプログラムです」と明確に銘打ったワークショップもあると理想かもしれませんね。たくさん考えるヒントをいただきありがとうございました。

伊藤亜紗さんのワークショップの事例をうかがい、アートを通して想像し、創造する活動は、障害の有無に関わらず、あらゆる人が、それぞれの持っている力で可能であることを考えさせられました。

盲学校の美術に関わることになったのが今年度からだだったので、今年度は、視覚障害のある方の鑑賞(平面、立体)についてや、そもそもアートの鑑賞とはどういうことなのかについて、考えたり、書籍を読んだりすることがありました。今回の書籍も購入しました。

今回のイベントで、鑑賞に関する話もあり、勉強になりました。視覚障害アートの専門家の方々でも、少しずつとらえ方や考えが違う印象も受け、それが逆に答えがはっきりあるわけではなく、アートというものは人によって、時代によって、環境によって、変わったり、動いたりするものなのかもしれないとも感じました。私は、美大を出て、作家として生きていきたい、作家活動を主軸において活動をしていたので、教育や美術教育に関わるのは遅く、今になってからになってしまいましたが、視覚障害者のアートについてこれをしなくてはいけない...、これが正しい実践というもの固定されていない方が、私のような途中からこの世界に関わることができたものにとっては、有難いと思うところがあります。ただ、的外れなことにはしたくないので、今、必死で学んでいます。中学の美術は週に1回です。その中で何を伝えるのか、どんな授業をすればいいのか模索と反省の日々です。この子にとって将来豊かな生活につながるものになるのか、そんな視点をもって向き合いたいです。

ありがとうございました。

出版への想いを、このようにお聞きするのはとても貴重だと感じます。全4回が終わった時に、自分が何をどう考えているのか楽しみです。

どなたのお話も大変興味深く、勉強になりました。「効率とスピード重視の近代社会システム」が障害者を排除しているとの指摘と、その中でアート役割は大きいとのお話に、その通りと思いました。